



もしもしドクター No.186



プレーパーク (冒険遊び場 The Adventure Playground、
der Abenteuerspielplatz) ①

まつだ小児科医院
松田 隆 院長

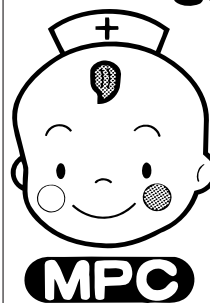
「プレーパーク」は「冒険遊び場 (The Adventure Playground、der Abenteuerspielplatz)」とも呼ばれ、デンマークをはじめヨーロッパを中心に広がった新しい遊び場で、「自分の責任で自由に遊ぶ」場として、子どもたちの好奇心や欲求を大切に、秘密基地づくりや木登り、穴掘り、泥んこ遊びなど様々な遊びの中で、子どもの自由な発想や独自性、自主性を尊重した遊びを実現できるようプレーリーダー (子どもの遊びを支える大人) に支援されながら自然の環境や水・土・木・火等も利用して、五感を使った体験ができるようになっていきます (常駐のプレーリーダーは、英国では「プレーワーカー」、ドイツでは「ペタゴ」と呼ばれ、子どもたちを“遊ばせる”ことはせず、人間的に子どもと関わりながら見守るといったスタンスをとることによって子どもが自由に遊べる空間を保証しています)。プレーパークは、従来の公園、既成のブランコ、シーソー、鉄棒などがあるようなお仕着せの遊び場と違い、一見無秩序のように見えて、子どもたちが想像力で工夫して、遊びを作り出すことの出来る遊び場です。

記録によれば、1865年から公共の遊び場というものがあったようですが、1937年にスウェーデン・ストックホルムでプレーリーダーを配置した遊び場が9ヶ所でき、1943年第二次世界大戦中にコペンハーゲン市郊外につくられた「エンドラップ廃材遊び場 (Geruempelspielplatz)」が世界で最初に作られたプレーパークとされています。造園家、公園設計家のC.Th.ソーレンセン教授が、こぎれいな遊び場よりも、ガラタのころがっている空き地や資材置き場で子どもたちは大喜びで遊んでいるという長年の観察に基づいて、建築家ダン・フィンクがデザインし、初代プレーリーダー、ジョン・ベルテルセンと子どもたちによって創られました。第二次世界大戦直後の1945年にエンドラップを訪れた造園家アレン卿夫人はこのプレーパークに深く感銘し、その思想を英国に持ち帰り、ロンドンの爆撃跡地にプレーパークを創り、冒険遊び場運動を広めました。英国で大きな流れとなった冒険遊び場運動は、発祥の地、デンマークに逆輸入され、1950～70年代を中心に、スウェ

ーデン、スイス、ドイツ、フランス、イタリア、米国、日本、オーストラリアにも広がり、現在、ヨーロッパ全体で1000カ所程度あるとされています。近年では、香港やカナダで、冒険遊び場づくりの新しい動きが生まれてきているようです。

1961年にIPA (国際遊び場協会) が設立され、日本では1970年代半ばにアレン卿夫人の著書「都市の遊び場」が翻訳・紹介され、1975年には大村夫妻らによって東京・世田谷で「子ども天国活動」が始められ、1979年に住民による遊び場運動と区行政の健全育成事業とが連携し、国際児童年の記念事業として「羽根木プレーパーク」が常設されました。市街地の中であって、生活地域の中で思い切り体を動かして遊べる日常空間が誕生し、同時に子どもを取り巻く様々な市民グループがこの場所を活用し、自主保育グループでの母親のネットワークづくりも促進されました。この1979年は国際児童年で、1989年の国際子どもの権利条約の採択に際しては、IPAは権利条約に遊び場の条項を入れるために働きかけを行い、第31条に遊ぶ権利が項目として入ることとなりました。その後、全国で草の根的に冒険遊び場づくりが広がり、1990年代後半からは飛躍的に活動団体が増えています。一方で、責任追及の風潮が広がり、子どもの行動が規制され、子どもの遊び環境が貧弱化していく中で、住民主体の自発的な運営により、現在190を超える団体が冒険遊び場活動に取り組んでいます。地域住民による運営が広がっているのは、世界的に見て日本の冒険遊び場づくりの特徴とされています。

まつだ小児科医院



診療科目
小児科
アレルギー科

院長 松田 隆
倉吉市新町3丁目1178番地
☎ (0858) 22-2959
☆予約電話 23-5489